

本論文は

世界経済評論 2021 年 7/8 月号

(2021 年 7 月発行)

掲載の記事です

2021年7月15日発行(7月号(金曜日)発行)
1963年創刊・通巻719号
世界経済を読み解く国際戦略の羅針盤
世界経済評論 7・8月号
2021 Vol.65 No.4
World Economic Review



世界経済評論

定期購読のご案内

年間購読料

1,320円×6冊=7,920円

6,600円

税込

17%

送料無料

OFF

富士山マガジンサービス限定特典

※通巻682号以降

定期購読
期間中

デジタル版バックナンバー読み放題!!



世界経済評論 定期購読



☎0120-223-223

[24時間・年中無休]

お支払い方法

Webでお申込みの場合はクレジットカード・銀行振込・コンビニ払いからお選びいただけます。
お電話でお申込みの場合は銀行振込・コンビニ払いのみとなります。

Fujisan.co.jp

雑誌のオンライン書店

「海ゆかば」、リヒャルト・ゾルゲ

「ゾルゲ事件」は長いこと気になっていたが、最近ふともっと知ってみようと何冊かの本を買った。きっかけは「海ゆかば」である。

武門の言立て

もっか書いている本には「侍と詩歌」という章を設けて、これを更に大伴家持、源頼政、歌連歌と戦国時代、明智光秀に分ける。中で大伴家持は万葉集に収録する4500首の10分の1以上を作ったから、この詩歌集の編集者だと考える人もいる。この詩人は陸奥按察使鎮守府將軍や持節征東將軍にもなった。この点、英国のエリザベス朝の武人かつ詩人 Walter Raleigh に比すこともできよう。

家持の長歌のうち「陸奥国に金が出たことを賀す」歌は、武門としての大伴氏が天皇に忠誠を誓う「海ゆかば」で始まる詩句を織り込んでいることで知られる。この誓言が後にNHKの委託で信時潔が曲をつけて歌になった。1937年だった。

この「海ゆかば」についてどんなことが言われているのか探していると、映画監督篠田正浩の短文があった。1975年、小学館が万葉集の校注本を新たに4巻本として出した時、その第四巻の月報に執筆を依頼されたのだろう、篠田は「私の万葉体験」と題する文を寄せ、「皇国少年」だった自分にとって「国のために命を捨てる情念を培う」万葉集は「聖典」だった。なかでも「海ゆかば」は「死の美しさと緊張」を教えてくれた。だから敗戦で「大君が神でなくなった日から」そういう「伝統的な詩法」に興味を失った、と言う。

こうした敗戦までの張り詰めた信念と敗戦直後の社会価値の転倒の違和感は多くの人たちが書いている。しかし、篠田のこの随想の目的は、敗戦も何年かたつと、それを考え直したことを告げることにある。

ほくは篠田の映画は『心中天網島』（英語題 Double Suicide）しか見ていなかったの、改めて映画歴を見ると『スパイ・ゾルゲ』（2003年）があった。これは篠田自ら映画監督として最後の作品と呼び、3時間の大作という。そこで、ゾルゲ事件を扱う本をいくつか買った。

愛国者と売国奴

まず、J. Thomas Rimer 編の『Patriots and Traitors: Sorge and Ozaki』（Merwin, 2009年）。編者のライマー先生は1975年、ほくを初めて大学に招待してくださり、その後いろいろ学界で推挽してくださった方だが、この種の本を出しておられることは知らなかった。収めるのは、Chalmers Johnson の本からの一章、尾崎秀実が獄中から妻英子にかいた手紙のいくつかの英訳、篠田の『スパイ・ゾルゲ』を含むゾルゲを扱う映画の概観、それに木下順二の戯曲「オットーと呼ばれる日本人」の英訳である。

このうちチャーマーズ・ジョンソンは『MITI and the Japanese Miracle』（Stanford, 1982年）が直ちに日本語に訳され、当時の通産省をいたく喜ばせたにちがいない。ほくも読んだ。後に「blowback シリーズ」として4冊の本を出し「アメリカ帝国」を批判したことは知っていたが、こちらは読まずに終わっていた。

blowback は2001年9/11のあと何人かの人が持ち出した言葉で、他の国で隠れてひどいことをやると必ず報復がある、そういう報復をCIAが呼ぶのだということで、この見方にはほくも躊躇なく賛同していた。しかしブッシュ大統領のアフガニスタン攻撃、続くイラク侵攻の混乱の中で消えてしまっていた。



佐藤 紘彰

ちなみに、ジョンソンは1967年から1973年までCIAの顧問を務め、その後も自らをCold Warriorと呼んでいた人だ。

もちろん、ジョンソンがゾルゲ事件のことで本を出していたことは知らなかった。そこで次に『An Instance of Treason: Ozaki Hotsumi and The Sorge Spy Ring』(Stanford, 1990年)を買った。みると、この本が最初に出たのは1964年、その後判明したことを訂正加筆した章を26年後にRepriseとして加えたものだった。

病原菌としての完璧なスパイ

それから、日本の書籍を求める時にいつも煩わす甥の茂に頼んで、尾崎秀実著『愛情はふる星のごとく』(岩波, 2003年)とリヒャルト・ゾルゲ著『ゾルゲ事件 獄中手記』(岩波, 2003年)を取り寄せてもらった。前者は尾崎の獄中の手紙を妻の英子が戦後まもなく雑誌に出し始め、後に全部本として出たが、この岩波版はそのほぼ半数の126通を収める。後者は1962年に出たものに篠田の「私のゾルゲ体験」を解説として添えている。前者ともに映画『スパイ・ゾルゲ』を契機として新たに出したのかもしれない。

篠田はそこで、「真珠湾奇襲という予想を超えた勝利に熱狂した記憶が消えない昭和十七(一九四二)年の五月、晴天の霹靂のようなゾルゲ国際諜報団の検挙の報道が一斉に新聞に載った」と書いて、共産主義といえば凶悪な「病原菌」と恐れられた時にそのスパイ団を潜入させていたことに屈辱を覚えたと書き加える。

リヒャルト・ゾルゲと尾崎秀実が逮捕されたのは1941年10月、二人が処刑されたのは1944年11月7日。ロシア10月革命記念日だった。

次に、Owen Matthewsの『An Impeccable Spy: Richard Sorge, Stalin's Master Agent』(Bloomsbury, 2019)。マシューはprologueで言う。1941年末ヒトラー軍のモスクワ侵攻が始まったときモ

スクワから西40キロの村も前線になった。その村で若いロシア娘ナタリアが疎開のためダーチャで大切な家財を纏めた翌朝、家の外で部隊がグーグー眠っていたのに気づいた。これはモスクワに攻め来るドイツ軍と戦うためシベリアから到着した援軍だった。

マシューは続けて言う。続く戦闘でこれらシベリア援軍は数十万のソ連軍と共に戦死したが、一つはこの援軍のおかげでソ連は対独戦争に対する巻返しの端緒を掴んだ。この援軍は、もしドイツ参謀本部と日本参謀本部に浸透したドイツ人スパイ、リヒャルト・ゾルゲがいなかったらいなかったかもしれない。ダーチャは破壊されず、くだんのナタリアは今でも住んでいる。私の妻はその孫娘だ、と。

英国の日本文学者Richard Storryが歴史家F. W. Deakinと書いた『The Case of Richard Sorge』(Harper & Row, 1966)は、リヒャルト・ゾルゲをまともに扱った最初の英語の本で、国際諜報の文豪John le Carréから「the spy to end all spies」を描くとの賛辞を得たが、注文したばかりである。

美しい歌

「海ゆかばは美しい歌だ」と言ったのは、戦後マッカーサー司令官の補佐官兼個人通訳になった「歌舞伎の救主」Faubion Bowersだった。パウアーズさんはコロンビア大学を出てジュリアード音楽院でピアノを専攻、1939年卒業後ジャワの音楽を研究すべく乗った日本客船が横浜に停泊、一年ほど法政大学で教えた。時の流行歌の一つが「支那の夜」とともに「海ゆかば」だった。1995年、ジェットロ・ニューヨーク事務所でも講演つきの昼食会を司っていたばかりは、日本敗戦50周年というのでパウアーズさんを招いたが、話の冒頭にそう言ったのである。

さとう ひろあき 翻訳家、コラムニスト在NY